がティベル河畔のオスティアまで參りました時、私の母は亡くなりました。私はいろ〳〵前途に急ぐことがムいますから、此處に澤山なことを省いて申しません。わが神よ、私が默つてゐて語らない數多の事柄に對して、私の懺悔と感謝とを受け納れ給へ。けれども私は此私を生んだ貴下の婢について、わたくしの魂か生んだことは少しも省きません。卽ち彼女は肉に於ては私を此世の光りのうちに生み、心に於ては永遠の光りのうちに生んだのでムいます。私が語らうとするのは彼女の賜物ではムいません、彼女に於ける貴下の賜物でムいます。何ぜかなれば、彼女は自身を造りもしなければ、また訓へもしなかつたからでムいます。彼女を造つたのは貴下でムいます。また彼女の父も母も、自分達からどんなものが出るか知らなかつたのでムいます。貴下の教會の善い一人であつた忠信なもの丶家庭に於て、貴下を畏れるやうに彼女を訓へたのは、貴下のキリストの笏、貴下の獨りのみ子の教訓でムいました。けれども彼女は自分の此善い訓練を彼女の熱心によるとするよりも、一人の老ひた下婢の手柄に致しました。恰も幼兒がいつも年長の娘の背に負はれる

やうに、彼女の父も其嬰兒の折りから此下婢に負はれて育つたのでムいます。さうした關係から、またその下婢はいゝ齡をしてゐたのと、卓越した氣品をそなへてゐたこととによつて、キリスト教を奉ずる人々の家に於て、その家長達から非常に敬はれてをりました。ですからその主人も自分の娘等の教育を此下婢にまかせ、彼女は熱心にその任務を果たし必要な場合には、私心のない嚴格さを以て、烈しく娘等を制し、誠實な考へを以て彼等を教へました。例を申せば、最も分相等な兩親の食卓で食事をする時の外には、どれほど渴いても、水一口飲むことすら許さず、惡い習慣に染まないように警戒し、斯ういふ巧まい言葉を申しました——「婦人達が水を飲むのは、酒をこゝろのまゝに獲ることが出來ないからのことでムいます。ですから御覽なさい、女が結婚して、物置きと、窖の主婦になつたときには、水なんか見向きもしないで、飲酒の惡癖に染まつてしまひます」と。斯うした教訓と、權威のある命令とで、彼女はその托された娘達の幼ない慾望を節制させ、彼等の切なる渴望を程よく整へましたので、彼等はその身にふさわしからぬことを望まないや

うになりました。

けれども貴下の婢がその子である私に告げましたやうに、酒を嗜むことが彼女の心に起りました。彼女は元來酒を飲まない乙女であつたのでムいますけれど、兩親の命によつて樽の上から、杯を入れて、その中の酒を汲み出すとき、その酒を罎に入れる前に、習慣として、少し唇につけて嗅るのでムいました。これ以上は彼女の心が許るさなかつたのでムいます。之も彼女は酒を飲みたい慾望からしたことではなく、たゞ少女時代の活氣があふれて此處に至つたのでムいます。かうして彼女は日毎にこの「少し」に、毎日の「少し」を加へ、段々とそれが嵩み、遂にはその小さな盃になみ〳〵と滿たして、貪り欲むところの習慣に陷つてしまひました。少しだからといつて輕く事を見るものは、少し宛墮落して行くものだからでムいます。そのときには賢い老婢とその熱心は諫めとは何處にムいましたらうか。主よ、貴下のお藥が私共を監視してゐなければ、どんなものが私共の秘そかな病に盗がムいませうか。彼女の父も、母も、また家扶も傍にゐないでも、家扶は常に近く

ゐましたのでムいます。私共を造り、私共を召し、また私共の上に立つ人々によつて、私共の魂を救ふことに何事かを爲し給ふ貴下は、我々に近くましますのでムいます。そのとき、我が神よ、貴下は何を爲し給ひましたか。どうして彼女を矯正し給ひましたか。如何してその魂を健全に復せしめ給ひましたか。貴下の秘密の庫から取り出し給ふた外科醫のメスのやうに、激しく、鋭い嘲罵を他の女の魂から抽き出して、只一突きに諸々の膿腫を切り去り給ふたではムいませんか。すなはち、いつも一人の女中が彼女と一緒に倉に行くのでしたが、その女中は、自分の若い夫婦とたゞ二人きりのとき、口論を始め、主婦の罪を指摘し、非常に鋭く罵り、彼女を「酒飲み女」と呼びました。この譏刺に心を貫かれた彼女は、自分の汚行を顧みて、直ちに是をいけないこととして棄てました。友人は私共の御機嫌を取つて、却つて私共を邪道に導きますが、敵は私共に反對して却つて私共を矯正致します。けれども貴下の審判は敵等の行爲によつて與へ給はず、敵等の意志によつて彼等に酬ゐ給ふのでムいます。即ち此下婢は怒りにまかせて、その若い主婦を苦しめんとお

もつたので、決して主婦を矯正せんが爲めに罵つたものではムいませんのです。ですから下婢は斯う人のゐないところで罵つたのは、只其口論の場所と場合とが偶然さうなつたのか、或は下婢が、そのことに遲く氣がついた油斷の咎めを自分が受けることを恐れたからなのでムいませう。けれども主にましまして、天にあるもの、地にあるものを治め、最も深き奔流をもみ心のまゝにかへ、世の流れの紊るゝを整へ給ふ者よ、貴下は一つの魂の不健全をもつて、他の魂を矯正し給ひました。それは、此事に氣付いた者、その矯正せんとおもふ者が、若しその言葉によつて矯正されても、それを矯正者自身の力に歸せないようにとの御配慮でムいます。

九　聖モンニカの德

斯のやうに彼女は淑やかに、眞面目に教育せられ、その兩親によつて貴下に仕へました、否寧ろ貴下によつてその兩親に仕へました。婚姻の年頃になつて、良人を迎へ、主に仕ふ

るやうにそれに仕へ、良人を貴下のものにしようと努め、行狀によつて範を示して、不言のうちに道を說きました。貴下はその爲め彼女を美しくし、恭敬にして、愛すべき、良人にとつて愛すべきものとなし給ひました。斯うして彼女は良人が閨房の紊れについてもぢつと辛棒して、嘗てその爲めに嫉妬して良人と喧嘩をするやうなことはムいませんでした。と申すのは、良人が貴下を信ずるやうになり、貴下の御憐みがその上に降らんことを期待してゐたからでムいます。けれどもまた良人は仁慈にすぐれてゐたと同じ程度に、怒ることも激しかつたのでムいます。そこで彼女は嘗に行爲に於てのみならず、また言葉に於てさへも怒つてゐる良人と爭ふてはならないと悟つてをりました。良人が若しフトしたことから、無思慮に怒ることがあれば、彼女は、彼がやがて怒りが挫けて、沈靜した、宜い折を見計ひ、自分がさうした理由を述べるのでムいました。なほも一つ最後に申上げますことは、是よりも柔しい良人をもちながら、しかもその醜くい顏に打たれた痕をもつてゐる多くの主婦達が、打ちとけた會話のうちに、自分の良人の生活を非難致しますときには、

彼女は彼等の口舌の端なきことを責め、冗談のやうに、しかも嚴しく諫めるのでムいました。彼女は申すのでムいます――「貴女がたが婚約書といふものゝ讀れるのをお聞きになりましてからは、それによつて貴女がたは下婢になつたとお思ひなさらんければなりませんよ。ですから御自分達の境遇をよく心にとめて、御主人達に御逆らひになつてはいけません」と。彼女がどんなに荒い良人に辛棒してゐるか知つてゐる主婦達は、パトリキアヌス（アウグスティヌスの父の名）がその妻を打ち、或は一日でも夫婦間に爭の起つたことを聞いたことがなく、またさうした證據も認めることが出來なかつたので、愕いてをりました。それで彼等は、親しくその理由を訊かれましたとき、私が前に申しました掟を彼等に敎へました。之を守つたものはその實行によつて感謝し、これを守らなかつたものは抑壓せられて、苦しみました。

母の姑もまた、はじめのうちは惡い下婢等の告げ口によつて、彼女にたいして立腹致しましたが、彼女は寬容と柔和とにより、また服從により打ち克ち、遂には姑は自ら進んで

自分と嫁との間に立つて、家族の平安を紊すところの使用人どもの中傷を、自分の子息に打ち明け、そんな者共を罰してくれと彼に願ふやうになりました。ですから母のいふことに從ひ、また家族の紀律と、家内の一致の爲めをおもふて、こんな不都合な使用人共を笞打つて懲らしました時、姑はまた誰にもあれ、自分を喜ばすつもりで、嫁のことを惡しざまに言ふものがあつたら、このとほりの罰を受けるものと覺悟をしてをれよと、申し聞けました。ですからそれから後はもう誰もそんな告げ口をするものもなくなつて、彼等は相互に珍らしく、樂しい寬容をもつて生活して行きました。

わが神、わが慈悲よ！貴下はまたこのやうな大きな賜物を、貴下の此善い婢（その胎のうちに貴下が私をつくり給ふたところの）に下し給はりました。斯うして彼女は、自分がさうすることの出來るときにはいつも、離反して、不和な人々の間に立つて、自ら仲裁者となりました。即ち双方の澤山な苦情（威張り返つて、生硬な爭鬪者達が吐き出すところの）を聞いたとき、また目の前にゐない敵に對する烈しい怨みが、そこにゐる友人との對

話のうちにあらはされるとき、彼女は和解に都合のいゝことよりほかには、どんなことをも双方に對して打ち明けることをしませんでした。もし私が不幸にして無數の仲間がやつてゐること(私はどんな恐るべき傳染によつて斯麼に罪が遠近に擴がるかを知りませんが)をもたなかつたなら、すなはち、啻に互に忿つてゐる双方の者にむかひ、各一方が他方に對して、怒罵の言を吐いたことを告げるばかりでなく、言ひもしなかつたことまでも、附け加へるといふことを知らなかつたなら、私のこの行爲もほんの些細な善事と私には見えたかも知れません。けれども人が若し、あらゆる最善を盡くして相互間の敵意をどうして消さうかと考へませんと致しましたなら、惡口を吐いて益々之を煽動するも、またその敵意を增さないにしても、つまらぬ一小事と見なければなりますまい。彼女はこんな人間でムいました。彼女の心の最も奥に師として在す貴下は、彼女の胸を學校にして、そこで彼女を敎へ給ふたのでムいます。

最後に、母はとう〳〵その良人の死際にそれを貴下に歸正さしたのでムいます。けれど

も彼が信者でなかつた時分に、非道な振舞をして、彼女が忍んでゐたことを、今は信者である彼に向つて、不平を言ふやうなことはムいませんでした。彼女はまた貴下の下婢等の婢でムいました。(創記第九章第廿五節) 彼女を知つてゐるものは誰でも、彼女に於て貴下を非常に賞讃し、尊敬し、愛慕致しました。と申すのはその聖い會話のむすんだ果が證明をして彼女の心に貴下のましますことを彼等は知つたからでムいます。即ち彼女は只一人の良人の妻でムいまして、その兩親を離れて、恭敬に自分の家を治め、善行の聞え高く、その子女を育てゝ、それが貴下から離れるのを見る度毎に、彼等のために產みの苦痛を感じました(ガラテヤ書四章十九節) なほまた最後に、主よ、あなたの御惠みにより、貴下の下僕どもに語ることを許し給へば、私は告白致します。母が死ぬる前に、貴下に於て共に結合して、貴下の洗禮の恩寵を受けました私共總てに向つて、彼女は恰も私共總てを生んだものゝやうに、心をくだき、それと同時に、私共總てが彼女を生んだものゝやうに私共に仕へました。

十　モンニカ永生に入る

けれども彼女がこの世を去るべき日、すなはち、あなたは知り給ふても、私共は知らなかつたその日が迫つて來ましたとき、フト私と彼女とは只二人立つて、とある窓に凭れてをりました。これ貴下が何かしら秘密な法に依つて此のとほりに取り計ひ給ふたものであると私は信じます。この窓から私共はテイベル河畔のオスティアの宿の庭園を眺めることが出來ました。此處にわたくしども、長い旅路に疲れきつた後、世の騷がしさから逃れてアフリカへ船出をしようと休憩してゐるところでムいました。ですから私共は親子水入らずに只二人、非常に愉快に談し合つてをりました。また既に過去となつたことは皆忘れて只將來にむかつて勵みながら（ピリピ書第三章第十三節）貴下の眞理のまへで、眼が未だ見もせず、私が未だ聞きもせず、人の心が未だ思ひもしなかつたところの（コリント前書第二章第九節　イザヤ書第五十四章第四節）聖徒の永遠の生命とは、どんなものであらうかと、私共は互に談しあつてをりました。けれ

ども私共はなほ私共の心の口をもつて、あなたの泉、すなはち、あなたと一緒にあるところの生命の泉である天上の流れを喘ぎ求めたのでムいます。と申すのは、私共が現在の能力に相應してこの泉に濡され、どうにかして斯の深い奥義を識ることが出來るようにと冀つたからなのでムいます。

そして私共のはなしは、肉的官能の至上の愉快といふこと、また物質的光りの最も輝いた光線といふことも、その世の樂しみと比ぶべくもないばかりではなく、その名を言ふにも足りないといふ結論にまで到達致しました。そのとき私共は、たゞひとりに在す主に對する熱情をいよ〳〵高めて、起ち上り、總ての物體を超越して、日と月と星とがそこにあつて地上を照らす諸々の天をさへも過ぎ行きました。いや、それどころか私共は衷なる瞑想によつて、あなたの聖業（わざ）をかたり、嘆美しながら更に高く昇り、遂に私共の魂に至り、やがてそれも越えて缺くることなく豐かな地に（エゼキエル書第廿四章第十四節）達すべく進み行きました。その地たるや、あなたが眞理の糧をもつて永久にイスラエルを養ひ給ふ處（詩篇第八十章第五節）で

ムいまして、そこでは生命は、總て存在するもの、また存在せんとするものを造つた彼の智慧なのでムいます。そしてこの生命は造られたものではなくして、その嘗て在りしが如く今もあり、後もまた、矢張りそのとほりで在るものなのでムいます。否、「嘗てありし」といふことも、「後にもあらん」といふことともそれに於てはなくて、只「在る」といふことだけでムいます。と申すのは此生命は永劫なものでありますのに、「嘗てありし」も「後にもあらん」も永却ではないのだからでムいます。私共は斯う語し、それに憬れてゐた間に私共の心の全努力によつて、それに少しばかり觸れることが出來ました。そして私共は嘆息致しました。私共の靈の最初の實がそれに結ばれて、私共に殘されも致しました。やがて是等の心から、言葉に始めがあり、終りがあるところの私共の口の聲音的表現にまで立ち戻りました。（そんなことを考へて遂に口に出して言つた）年をとらないで、久しきに亘り、萬物を更新し給ふ我等の主なる貴下のみ「言（ことば）」によく何物が似てをりませうか。

ですから私共は申しました。——若し誰でもその肉の騒ぎが靜つたならば、若し地や水

や、空やの幻想もまた靜まつたならば、若し天の極が極まつたならば、若し魂さへもそれ自身に對して靜まつたならば、また自分を思はず、自己を超越したならば、若しあらゆる夢や想像の啓示が靜まつたなら、あらゆる舌と、あらゆる表徴が靜まつたなら、若し何にもあれ過ぎ行ものが、何人に對しても沈默したら——といふのは、若しか誰かゞ彼等の言ふことを聞き得たとしたならば、是等のものは皆、その人に對して「我等は自らを造らず、永久に存へたまふものわれらを造り給へり」（詩篇第百の三）と云ふでムいませうから——また若しその人が獨りで語りますなら、即ち彼等によつてゞなく、彼自らによつて、私共が彼自身の言葉、すなはち、肉の舌によつて發せられず、天使の聲によつて發せられず、雷の音によつても發せられず、又類似の晦澁な謎によつて發せられない、彼自身の言葉を私が聞くために、けれどもまた、私共が是等の被造物に於て愛する其人、丁度今私共二人がそんなものによらないで、私共自分だけで努力して、敏速な思想に於て、總てのものに臨み給ふところの、永遠の叡智にまで到着したやうに、さうした外のものによらず、只その人だ

けに聞くために、また若し、此精神の上昇が續くことが出來たとして、更に他の遙かにちがつた總ての幻影が全然取り去られて、此一つの上昇が私共を夢中にならせ、嚥み込んでしまひ、彼等を見てゐる者を、我々が今嘆息して求めた此悟りの瞬間の如く、彼の生命が永久にあるように、是等の一層内部的な歡喜のうちに包むことが出來たと致しましたならば、それこそは「汝の主の歡喜に入れよ」（マタイ傳第廿五章廿一）といふことになりは致しますまいか。そしてまた何時此事がムいませうか。それは私共總てが甦る時でムいませうか、よしや總ては變らぬにしても。

私共は斯麼とを語りました。尤も斯麼ふうではなく、またこんな言葉でもムいませんでしたが、それでも主よ、貴下は知ろしめします、私共がこんなことを語り、そしてまた私共が語りましたとき、この世と、それに屬する一切の喜悅とが、輕蔑すべきものとなりましたとき、母は私に斯う申しました——「倅や、私から見れば、この世の中にはどんなものも最早私を喜ばせるものはありません。わたしはなほ此世にゐて何をするのでせうか。

また何のために私は此世に生きてゐるのでせうか、私が此世に於ける望みはもう叶つてしまつたのですから、私には薩張り分りません。けれどもたつた一つのことがありました。その爲め私はしばらく此世に止まることを願つたのでした。それは私が死ぬまへに、お前が公教會の信者になるのを見度いことだつたのです。私の神樣は、わたくしのために、充分に、思つたよりもまさつて、此事を果し給ふたのです。かうして私は今お前が地上の幸福を輕蔑して、キリストの下僕となつたのを見てゐます。だから私はもう世の中に何もすることはありません。」

十一　母の死

此話に對して私は何と母に答へましたか、よく記憶致してをりません。と申すのは、それから後未だ五日を經たないのに、即ち五日以内に、母は熱病に罹つて斃れたからでムいます。そして此病のあひだ、一日母は失神致しまして、しばらくのうち、何にも見なかつ

たのでムいました。わたくしは母のところへ馳せつけました。けれども程なく母は正氣にかへつて、私と弟のナヴィギウスとがゐるのを見て、詰問するやうに「わたしは一體何處にゐるのですか」と私共に訊きました。それから悲しみに打たれてゐる私共を眺めて「お前達の母を此處へ葬るのですよ」と、申しました。私は默つて、ぢつと涙を呑んでをりました。けれども弟は、知らぬ他鄉の空でなくて、故鄉の土に母が死ぬことが幸福であらうから、自分はさうおさせ申したいと申しました。これを聞きました母は、弟がなほそんな浮世のことを好むのを知つて、心配さうな顏つきをして、眼でもつて彼をたしなめ、私の方をながめて――「御覽な、まだあんなことを言つてゐますよ」と言ひ、すぐにまた私共二人に對ひ――「此肉體は何處葬つてもいゝよ。そんなことを決して彼是と心配することはいりません。たゞ私がして欲しいのは、お前達が何處にゐやうとも、主の祭壇に於て、私を想ひ出しておくれだことです」と申しました。母の自分の意志を斯う言葉にあらはした後、病氣が嵩うじて、默つてしまひました。

けれども眼には見え給はない神よ、貴下が忠信なものどもの心に窃かに注入して、そこから斯麼不思議な果實が產出される貴下の賜物を考へましたとき、私は喜んであなたに感謝を捧げました。私は母がどんなにか自分の墓について心配してゐましたかを、卽ち母はその良人のそばを指定し、そのつもりでゐたことを想ひ出したからなのでムいます。父と母とは非常に睦じく暮らしてゐたのですから、母はその幸福のうへに、また死んでまでも一緒にゐたい、神が彼女に、海を越えて遙々と巡禮の後、今や遂に彼女の故鄉に於て、良人たる妻たる土の部分（人は土によつてつくられたといふ。その故に此處では肉體といふ意）が、同じ土で覆はれたといふことを人々に語られたいと望んだのでムいます。けれども此虛しい思ひが、貴下の豐かなる御慈悲によつて、何時彼の女の心から排斥し去られたかを私は存じません。けれども私は今それがそんなに爲されたことを斯うも明白に見ましたのを、非常に感嘆して、喜んだのでムいます。尤もまつたくのところ、私共が窓際で話し合つたとき、母が――「私はもはや此世で何をしませう」と、申しましたとき、彼女は最早、その自分の故鄉で死なうといふ

望みを色にみせなかつたのではムいますが。その後また、私共がオステイヤにをりまして私は不在であつたとき、如何にも主婦らしい自信を以て、母は私の友人達と一緒に、此世の蔑しむべきこと、また死の祝福について語らつたのでムいます。すると貴下がかよわい女性にこのやうな勇氣を與へ給ふたのを見て、彼等は驚き――「貴下は御自分の故郷からこんなに遠く離れたところで死ぬのがおいやではムいませんか」と訊ねました。そのとき母は――「何ものも神よりは遠くムいません。また世の終りに、神様が私を甦らせ給ふのに、私が何處に居るかを御存知遊さないだらうといふ心配は少しもムいません」と申しました。で病みついてから九日めに、享年五十六歳で、此信仰の篤い、敬虔な魂は、肉體の束縛から解放せられました。私は丁度その時三十三歳でムいました。

十二　モンニカの死を悼む

わたくしは母の眼をとぢてやりました。すると、言ひしらぬ悲みが私の胸に起りまして

涙となつて溢れ出ました。私の眼は同時に私の心の激烈な命令によつて、その泉を汲み出しました。その苦悶は私に甚だ辛らうムいました。それから母が最後の息を引き取りますが否や、私の伴のアデオダトウスはワッと大きな聲をあげて泣き出しました。そしてとうとう私共皆に制せられて、やうやう靜まつたのでムいます。それと同樣に私から涙のうちに滑り出たところの、私自らの或る小兒らしい女々しさも、私の胸のうちにある、「大人ぢやないか貴樣は」といふ聲に遮られて、默つてしまひました。何ぜかなれば、私共は泣きの涙と、嘆息とをもつて此葬式を行ふことは正しくないと思つたからでムいます。そのことをするのは不幸な者、あるひは全く滅亡したと思はれる者を哭くときの習慣なのでムいます。然し彼女は死んでも不幸ではなく、また全く死んでしまたたのではなかつたのでムいます。私共は確な理由として、彼女の善き會話と、その僞りのない信仰とを握つてをりました。

では私の内心を悲痛ならしめたものは、一緒に生活する愉快な、親愛な習慣から突然裂

かれてしまつたことにより生じた生々しい疵以外は、何でムいませうか。母が最後の病ひに罹つてゐるとき、わたくしの孝順をいとほしく思つて、私のことを「大變に親切にしてくれる」と申し、また私の口から、ついぞ彼女に對して荒らい言葉や叱責の發しられるのを聞いたことがないと、母が申しましたとき、私はその證明に對して喜んだのでムいますけれども私共を造り給ふた神よ、私が母に拂つた尊敬は、どうして私に對する母の奴隷的奉仕に比較することは出來ませうぞ。ですから私が母を奪はれました時、私の魂は傷がつきました、そして私と彼女の魂とから成り立つて、一つとなつてゐた生命は、まるで切り裂かれたものゝやうになりました。

そこで私の伴が泣き止みますと、エウォディウスは竪琴をとり詩篇を歌ひ出し、全家はそれに唱和致しました——「主よ、われ汝はむかひて、憐憫と審判とをうたはん」（詩篇第百の一）と。けれども私共がしてゐたことを聞いて、多くの兄弟達と、信仰の篤い女達とは一緒にやつて來ました。そして、葬儀をすることをその務めとしてゐる人達が、慣習どほりにそ

の準備をしてゐる間に、私自身は、家のうちの一部に於て、私をうつちやつて置くことがよろしくないと思つた人々に對して、私の力の及ぶ限り、時宜に適したと思ふことについて話しを致しました。斯うして眞理の膏藥を貼ることによつて、只私自身にのみ知られてゐる内部の苦しみをなだめました。しかし他のものは私の苦しみを知らないで、私の言ふところを熱心に傾聽して、私が悲哀の感情をもつてゐないと思ひました。けれどもわたくしは、彼等のうちで誰も偷み聞くことの出來なかつた貴下のお耳にむかつて、自分が餘りに情に脆いことを責め、私の悲しみの涙をとゞめました。もつとも悲哀はいつもの烈しさをもつて再びおそふて來ましたけれど、少しく負けたゞけで、涙を流すほどにはならず、或は顏付きが變るほどには至りませんでした。それでも私は心の底に何を抑へつけてゐたかをよく承知してをりました。また私は斯うした人情といふものが、私に對してこんな力をもつてゐるのを見て、甚だしく憤りました。こんなことはその順序として、また私共の天性の命ずるところとして、必然起らねばならないことなのでムいます。で私は自分の

悲哀に對して新らたな憂慮を抱いて悲しみ、かくして二重の悲しみに疲れ果てゝしまひました。

けれども、遺骸が野邊の送りをされたとき、私共二人は涙を流さずして往き、歸つて來ました。すちはち、私は祈禱するときにも、また屍體が墓のそばに置かれ、それが土の中に入れられるに先ち、彼女の爲めに、貴下に捧げられる贖ひの犧牲が慣習によつてさゝげられましたとき、私共が貴下にむかつて致しました祈禱に於ても私共は泣きは致しませんでした。けれども私は終日、窃かに悲しみ、萎れる心をいだいて、どうぞ私の悲哀を癒して下さいと、一生懸命に貴下に御願ひ申しましたけれど、貴下は癒して下さいませんでした。わたくしは思ひます、この一つの教訓に鑑みますと、今は欺きの「言」をその養ひとしない心にさへも、習慣の力の及ぼす影響がどれ程大きいかを、私に記憶せしめたまふたのでムいます。

そこで、私は浴場へ行つて、身を洗ふがよからうと思ひました。と申すのは沐浴 Bain

ein は、心から悲しみをまぎらはす爲めに、希臘語 βάλλω (棄てる) ἄνια (悲み) の二字から出來た βαλανεῖον に語源をもつて語であると聞いてゐたからでムいます。けれども、照覽ましませ、孤兒の父よ、私共はまた貴下の御慈悲にゐして告白致します。私は沐浴致しましたけれど、さうしなかつた以前と變つて、ちつとも心が落着いたやうにも覺えませんでした。私の心からは、少しもその悲哀の苦がい味が放散致さなかつたのでムいます。そこで今度は寢てみましたが、醒めての後も、依然として、私の悲哀は少しも和げられてゐないことをみいだしました。私は自分獨り、寢床にをるとき、貴下の司數アムブロシウスの眞正な詩を憶ひ出しました——

神は萬物の造り主
また天の主宰者
日をかざつて光をまとはせ
夜には柔かき熟睡を與へ

弱くなれる節々を新たにし
再び働く力を得させ給ふ
疲れたる心を熾にして
惱める胸より憂慮をとり給ふ

私は少し宛、貴下の婢の昔のことを考へ、彼女の貴下に對つての神聖な愛着と從順とを想ひ出しました。私はそんなものを俄に奪はれてしまひましたので、母について、母のために、なほ私について、また私の爲めに、貴下のみまへに泣きたいと存じました。そこで私は抑へてをりました涙にまけて、心のまゝに溢れしめ、それを枕として私の胸をやすませました。と申しますのは、其處には私の悲哀に對して、高いところから物を言つてゐるやうな人間の耳ではなくて、貴下のお耳があつたからでムいます。主よ、今わたくしは書をあらはして、貴下に懺悔致します。讀み度い者はそれを讀むがよく、解釋したいものはどうにでも解釋するがようムいます。そしてその者が、若し私の母、すなはち私の眼から

すれば今は死んでしまつてゐても、多年の間私を貴下の御眼の前に生けるものにし度いと願つてゐた私の母の爲め、ほんの僅かな時間、私が哭したから、罪を犯したと言つて、私を嘲笑せしめないようにして頂きます。然し彼が大きな慈悲の人でありますならば、貴下のキリストの兄弟達の父にまします貴下に對して、私の罪の爲めに寧ろ泣かして下さい。

十三　亡き母の爲めに祈禱

けれども私の胸は、肉の想念に從つたとの非難をも受くべき、かの傷をもう癒やされてをりましたから、私の神よ、私はこの貴下の婢のために、ずつゝ異つた種類の涙をあなたにむかつて注ぎました。それはアダムに於て死するあらゆる魂の（コリント前書第十五章第廿二節）の危險を眞面目に思ふてくだされた心から、注ぎ出される涙でムいます。また彼女が肉の束縛から解放せられなかつた以前に、キリストによつて生き、その信仰と行爲とによつて、貴下の御名を稱讃して活きてはをりましたけれど、貴下が彼女を洗禮によつて再び生れしめ給

ひまして以來（同第十五章第三節）貴下の御誡めにさからう言葉をその口から出さなかつたとは、私は敢て申しますまい。（マタイ傳第十二章第廿二節）眞理にまします貴下のみ子は宣給ひました――「兄弟に向ひて、痴者よと云ふものは、地獄の火にあるべし」（マタイ傳第五章第二十二節）と。そして貴下が若し慈悲を棄てゝ、きつと糺彈し給ひますならば、人々のうちに稱讃せらるべき生涯を送つたものといへども、助すかりやうはムいません。（詩篇第百四十三の二同第百三十の三）けれども貴下は、咎を訊し給ふことが嚴しくムいませんから、わたくしは貴下にむかつて立ち得べき處があることを信じ、且つ希望するのでムいます。けれども若し誰にても貴下にむかつて、自分の眞價を算へるとならば、貴下の賜物のほか、何を貴下にむかつて算ふべきでムいませうか。おゝ、どうぞ人は自ら人であることを知り、（詩篇第九篇二十節）また誇る者は主にありて誇りますように。（コリント前書第一章廿一節同上後書第十章十七節）

ですから、私の讃美にして、私の生命なるわが神よ、私が感謝をもつて貴下に感謝致しますとところの私の母の善い行ひを暫時措いて、今わたくしは彼女の爲に貴下に乞ひ願ひ

奉ります。呪ひの木に懸り、そして貴下の右に座して、私共の爲めに執成をして下さるところの（ロマ書第八章第廿四節）私共の藥（キリストの事）により、どゐぞ私に聽いて下さいまし。彼女は慈悲深い行ひをして、負債ある者に負債を免るしました、（負債とは廣義に解し罪）ですから貴下もまた彼女が救ひの水を受けましてから以來、多年の間に積りに積つたその負債をも免るして下さい。どうぞ免して下さいまし、主よ、私から御願ひ致します。彼女の審判（さばき）にかゝはらないで下さいまし。憐憫を審判に打ち克たして下さいまし。貴下のみ言葉は眞（まこと）でムいまして また貴下は憐憫ある者には憐憫を約束したふたからでムいます。憐まんとする者を憐み、また慈悲を施さうとする者に慈悲を施し給ふ貴下は、彼等をして憐憫ある者と爲し給ひました。

そしてまた私は自分の願つてゐたものを既に主が果して下さつたことを信じます。けれども主よ、願くは誠意から致しますところの私の献物を受けて下さいませ。何ぜかなれば母は此世を去るべき日が近寄りますと、その肉體をくだ〳〵しく包んだり、或は香料をも

つて薫らすことなどを思はず、また立派な記念碑を建てることも願はず、故郷に墓を置くことをも思ひませんでしたし、こんなことを私共に頼まず、只貴下の祭壇に於て自分が記憶せられるように願つたからでムいます。この貴下の祭壇に彼女は一日も仕へないで過した日とてはなく、又此處から聖い犠牲の分ち與へられることを知つてをりました。此犠牲によつて、私共に反對する證書（コロサイ書第二章第十四節）は塗り消されるのでムいます。またこれによつて私等は敵と闘つて凱歌を奏するのでムいます。敵は私共の過ちを算へ上げて、私共に責を歸すべきものを求めますけれども、その犠牲の方に於て、何ものを見出すことはムいません。私共は彼に於て勝ちまする。彼に對して罪ない血で償ひを爲すことが出來ませうぞ。彼の方が私共を贖ひたまふた價を償ひ、そして私共をあの御方から取り去る者は誰でムいませう。私共の贖ひである此聖典に、貴下の下婢（モンニカの事）の子は、その信仰の絆で結ばれました。どうぞ何人も彼女を貴下の保護から離らさないように。獅子も、龍も（共に惡魔）暴力も、乃至は詐瞞も邪魔をしませんように。といふのは、彼等は奸智に富む告訴者のた

めに罪を被せられ、とらへられることを恐れて、自分は何の負債もないと答へず、たゞ自分の罪は、誰もその代價をつぐなふことの出來ない彼の御方が、御自分は何の罪も負つていらつしやらないのに、私共に代つて、つぐなつて下さつたので、赦るされてゐるのだと答へるでムいませう。

ですから、どうぞ彼女が安らかに其良人と共にゐるように御願ひ申します。彼の前にもまだ後にも、母は誰にも嫁ぎませんでした。良人を貴下のものとなさんがため、彼女は貴下にまで結果する（ルカ傳第八章第十五節）忍耐をもつて良人に從ひました。靈をそゝいで下さい。おわが主わが神よ、心と聲とを書とを以て私が仕へまする貴下の下僕達である私の同胞に貴下の子等である私の主達に靈をそゝぎ、凡そ是等のことを讀むものをしてみな悉く貴下の婢モンニカと、その暫時が間の良人であつたパトウリキウスを、貴下のみ前に回想せしめて下さい。貴下は彼等の肉體によつて私を此世に出して下さいましたが、どうしてゞあつたかは私は存じません。どうぞ人々をして此移り行く世の光りに於ては私の兩親であ

り、私共の公教の母に於ては、私共の父にまします貴下の下にある私共の兄弟であり、また貴下の巡禮の民（ヘブル書第十一章第十節同上第十三章第十七節）の出てから歸り着く日まで、（生れてから死ぬるまでの意味也）慕ひ喘ぐところの永遠のイエルサレムに於ては私と市民仲間である彼等二人を、敬虔なる情をもつて記憶にとめさして下さいませ。かうして私が、母の私に對する最後の要求の、私の祈禱によるよりかも、寧ろ告白により、また多くの人々の祈禱により、一層ゆたかに彼女に對して成就せられまするように。

冥想懺悔叢書講讀便法

一、本叢書は全部で六卷です。其發行の順序は裏面記載の通であります。

一、本叢書講讀の最便法は六冊分一時前納拂か三冊分一時前納拂が一番便利でございます。

三冊一時前納　金七圓五十錢
六冊一時前納　金十四圓也

一、右御注文は各地の書店で取扱ひますから御近所の書店へ御申込を願ひます。

大正十二年一月十五日印刷
大正十二年二月[redacted]日發行

オウガスチン冥想錄
定價金二圓六十錢

翻譯者　宮原晃一郎
發行者　森脇美樹　東京市牛込區水道町三十八番地
印刷者　寺田國太郎　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二
印刷所　早稻田印刷株式會社　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二

不許複製

發行所　株式會社　文明書院　東京市牛込區水道町三十八番地
電話番町三五四二番
振替東京一七二〇番

本叢書の發行の順序は大略左の通りに決定致しました、而して二月刊行分パスカル感想錄は譯者柳田泉氏の手を離れて目下整版中。三月刊行分エピクテータス語錄は佐久間政一氏が已に譯了の所獨逸から新著が着したので之れと對照目下原稿整理中。四月分以下は夫れ〴〵譯者は心血を濺いで其完成に苦心中であります。

一月刊行　オウガスチン懺悔錄

二月刊行　パスカル感想錄

三月刊行　エピクテータス語錄

四月刊行　アウレリアス冥想錄

五月刊行　ダンテ新生

六月刊行　カアペンタア吾が日吾が夢

伊太利クロチエ博士著桂井當之助君譯

實際の哲學

菊版約五百頁定價二圓五十錢

時事新報評　著者は精神を以て實在の穩和と斷じ之を純理と實際との兩活動形式に大別したり。本書は後者たる實際の活動的關係を說明せるものにして玆に邦譯を得たるは我國學界の爲めに慶賀すべき現象と謂ふべし。

英國ヂョンストン氏著小野寺一男君譯

生物の哲學

四六版約四百頁定價二圓五十錢

國民新聞　評リバープール大學の水產學教授にして生物學上乃至哲學上に該博なる知識を有する人として知らる。科學とは與へらるゝものを記述するの意、哲學は是れを理解せんとするものであると云ふ法則を前提とし生物學を科學として論ずると共に他面之を哲學的意見より窺知せんとするを以て主眼とする好著である。

獨逸オイケン博士著三並良君譯

宗教の眞諦

四六版八百餘頁定價四圓五十錢

大阪毎日新聞　評著者は新理想主義の哲學を唱へて現代哲學界に新生命を與へたり。博士の尤も得意とする所は宗教哲學にして、多年心血を濺ぎて得たる結晶が卽ち本書なり、而して譯者は宗教哲學の造詣深く獨語を能くし著者と昵懇の間柄なれば本書の好譯たるは論なかるべし。

英國カアーペンター博士著宮島新三郎君譯

愛と死

四六版約四百頁定價二圓五十錢

東京朝日新聞　評著者は現代に於ける最も偉大なる大思想家たり。而して其の科學的にして哲學者且つ詩的なる其作物中特に重要位置を占むる名著を宮島氏が忠實に譯したるもの卽ち人生哲學乃至死生哲學として而も生活其物に對して戀愛哲學を示す所學んで光明の平和の世界に悟入する思なくばあらず。

獨逸オストウアルド博士著後藤格次君譯

價値の哲學

四六版五百八十頁定價二圓五十錢

東京日々新聞評　本書は自然科學界の大哲人たる博士が其專攻科目たる熱學の法則より其世界觀の說明を試み科學者の周匝精緻なる研究を以て精神の世界に過ぐるところべルグソン、オイケン等の純學者以外に又思想界の一大重鎭たり、本譯によりて此大思想を日本に傳ふるを得たるは眞に幸福と謂ふべし。

英國ダーウィン博士著阿部文夫君譯

種の起原の基礎

四六版四百餘頁定價二圓五十錢

時事新報評『種の起源』の發行に先つ事十六七年其著者が認めたる原稿を其第三子なるフランシスダウインが近年遺稿中より發見し之を編纂して公にせる者なり、本書を通讀すればダウインの科學思想の變遷の跡を研究するを得ると同時に世界的名著の大發見の奈邊に存せしかを知るを得べし。

獨逸ヘッケル博士原著後藤格次君譯

生命の不可思議　上下

四六版各冊四百餘頁定價各二圓五十錢

大阪朝日新聞評　現代の生物學界の泰斗にして獨逸に始めてダーウインの進化說を採用したる鴻儒ヘッケル博士の名著の翻譯にして宇宙に於ける人類の地位に關する博士の結論と炭素の蛋白的化合物よりの有機的生命の進化に關するものとの斷案は始めて本書にあり、蓋し本書は博士の著作中最も精力を注ぎたるものにして名著中の名著とす。

米國グレゴリ氏著田制佐重君譯

科學の精神と其効用

四六版約四百頁定價二圓五十錢

讀賣新聞評　クラスゴー大學物理學教授にしてサイエンスに對する全く從來と異れる新卓說の提示である讀者は該著に依て人類生活國家生活乃至個人生活に對して科學が如何に重要緊切な密接關係を有するかを了解し科學の眞使を悟るであらう

515
35

終